人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	協力的・参加的・体験的な学習を効果的に進めている実践事例

１．基本情報

○都道府県名及び市町村名

岩手県大槌町

○学校名

大槌町立吉里吉里中学校

○学校のＵＲＬ

２．学校紹介

○学級数

【通常の学級】全学年各１学級、【特別支援学級】１学級、【合計】４学級

○児童生徒数

【全生徒数】100 人（平成 22 年４月１日現在）
（内訳：１年生 32 人、２年生 34 人、３年生 32 人、特別支援学級２人）

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】
生きる力
学ぶことを喜び、意欲をもち、いろいろなことに挑戦し続ける生徒（知）
たくましく生き抜く生徒（徳・体）
【人権教育に関する目標】
「自他の思いを伝え合い、互いに認め合いながら自己実現を目指す生徒の育成」

○人権教育にかかる取組の全体概要

（１）互いに認め合い、高め合い、支え合おうとする協調性を養うために
全校生徒が５～６人のグループ（１年から３年の縦割り集団）をつくり、ＰＴＡの協力を得ながら約 16 ㎞の道のりを歩き抜く「吉里吉里中大遠足」を実施した。

（２）自他を尊重し自己実現を目指す態度の育成のために
２年生において、県内の牧場での２泊３日の農業体験学習や、町内の福祉施設で介護体験活動を位置付けた。

（３）生徒の責任感や主体性を高めるために
小学校６年生児童とその保護者を対象にした入学説明会において、中学校生活について生徒が説明する場面を設けた。

３．特色ある実践事例の内容

本校は小規模校であり、小学校から同じ人間関係の中での学校生活が続いている。交友範囲も狭く、人間関係が固定化する傾向が強い。その結果、自分の割り当てられた役割を果たすことで満足し、意見を出し合って互いに認め合い高め合おうという意識が不足している。

そこで、本校では学校経営の重点目標の１つに、「人権の尊重と基本的生活習慣の確立」を掲げ、生徒理解に努めるとともに、いじめなど人権侵害をなくす生活態度の確立と社会に通用する節度のある人格の育成を目指している。

日常の学級活動・生徒会活動において互いに意見を交わす手立てを組み入れ、異校種・異年齢交流・体験活動等をとおし、自他の大切さを感じ取らせることにより、自他の思いを伝え合い、互いに認め合いながら自己実現を目指す姿勢が育成されると考え、本研究主題を設定し研究を進めることとした。今回は、平成22年度の取組のうち、前述の「全体概要」で挙げた事例について述べる。

（１）互いに認め合い、高め合い、支え合おうとする協調性を養う取組

吉里吉里中大遠足（７月末）

・ねらい

グループ内で励まし合い協力し合いながら長い距離を歩き通すことにより、一人一人のたくましさを培うとともに、望ましい集団としての協調性を養い、達成感と成就感を味わわせる。

・内容

１年生から３年生まで５～６人で構成した 14 グループで、約 16 ㎞のコースを５時間半から６時間歩き通す活動である。各グループの出発を２分差にしてスタートさせた。チェックポイントを４か所設け、そのほか安全確保のために数地点でＰＴＡの方々に見守っていただいた。

事前の取組では３年生のリーダーを中心にグループ毎に目標を設定し当日までの士気を高めるようにした。

ＰＴＡ約 30 名の協力を得て、教職員とともに各グループと一緒に歩いたり、コースの要所要所で見守ったりしていただいた。保護者の皆様には、励ましの言葉などを積極的にかけていただいた。

事後、自分自身とグループの活動について、グループ毎に振り返るまとめの活動を位置付けた。

・成果

猛暑の中、グループ内では、苦しくともゴールに向かって励まし合う姿が多く見られた。３年生のリーダーを柱として、学年を越えた人間的なふれあいに満ち、充実した活動を行うことができた。一人一人の達成感とともに、集団で活動するよさを味わうことができ、協調性が養われる活動となった。

また、ＰＴＡもこの取組の成果を受け止めてくださり、学校経営の理解へつながった。

（２）自他を尊重し自己実現を目指す態度の育成のための取組

宿泊農業体験学習（８月）

・ねらい

風土を生かした地場産業について体験的に学び、第１次産業に従事する方の仕事の苦労ややりがいにふれ、勤労を尊び自分の進路について真剣に考える態度を養う。実行委員会を組織した自治的活動をとおして、仲間の大切さやよさを再発見し、集団活動の在り方や集団の中の個人の在り方について学ぶ。

・内容

２泊３日で、くずまき高原牧場において、牧場体験（育成牛、肉牛、仔牛、シイタケ栽培、乳製品製造）を行い、従事している方とのかかわりや直接体験をとおして働くことの意義を学んだ。

また、実行委員会を組織して、一人一人が集団生活での自分の役割を自覚し、活動の見通しをもって、生徒同士のかかわりを深めながら取り組むことができるようにした。

事後は、感想文を作成して自分の考えをまとめる活動を位置付けた。

＜生徒の感想より＞

＊　仔牛の世話は、ハエがいっぱいで匂いもきつくて大変だったけど、ミルクを与えると表情がかわいいなあと思った。自分にとって、就きたい職業とは違うけれど仕事の大切さがよく分かる体験となった。

＊　育成牛の世話は、バークの小屋入れとえさやりだった。みんな一生懸命がんばっていた。いつも食べている牛や豚を育てている農場のみなさんは力仕事がたくさんあって大変だし、すごいと思った。

＊　ミルクハウスで乳製品製造の作業をした。何百本ものビンを手分けして洗い、鼻をつまみたくなるようなにおいにみんなで耐え続け、黙々と進めた。消毒液に長時間触れていたので、みんな少し手が荒れ、「過酷な仕事すぎる・・・」と本音が出るほどつらい仕事だったが、みんなで力を合わせてやりとげることができた。

・成果

仲間と共に力を合わせ、苦労を分かち合いながら仕事をやり遂げることにより、連帯感がうまれ、互いに認め合い、支え合う活動となった。働くことの意義や楽しさ・厳しさを受け止め、そのことから勤労を尊ぶ態度が養われ、望ましい職業観の育成につながった。

福祉体験学習（９月）

・ねらい

地域の福祉施設で高齢者の方々とのふれあいをとおして、相手の立場にたって接することの大切さや思いやり、いたわりの心情を育て、社会における自分の役割について考えたり、ともに助け合って生きるために必要な社会奉仕の大切さに気付かせたりする。

・内容

町内の福祉施設「四季の里」において、施設の清掃、昼食の配膳、高齢者の方の話し相手等の活動を行った。初対面の高齢者の方々に対して、ふさわしい接し方や気遣いの大切さ、社会奉仕の大切さについて学んだ。

・成果

初めは戸惑いを感じていた生徒たちが、次第に高齢者の方々とのふれあいを深めていき、人をいたわる気持ちや相手の立場に立って考える想像力を養うことができた。さらに、「感謝される」ことで、「役に立つことができる自分」や「自分のよさ」に気付き、自己肯定感や自己存在感を実感することができた。

（３）生徒の責任感や主体性を高める取組

入学説明会（２月）

・ねらい

小学生及びその保護者が、在校生の学校生活を理解することができるように、効果的な説明の仕方やその方法について主体的に考え、判断し、実践する態度を養う。

・内容

学習の取組、生活のきまり、生徒会活動の紹介、中学校生活全般という４つの話題について、小学生に分かりやすく、中学校生活への期待や意欲をもつことができるように紹介内容を考え、説明を行った。

・成果

　自分たちで責任をもって学校を紹介するという責任感をもち、自分たちの学校のよさについて振り返るきっかけとなった。また、生徒自身がさらによりよい学校生活を送りたいという意欲ももつことができた。さらに、聞き手の小学生を意識して説明を工夫することは、中学生としての自覚をもたせることにもつながった。

４．実践事例の実績、実施による効果

・　校内での生徒同士、地域や保護者の方々、小学生等、多様な人とのかかわりを位置付けた活動が、生徒の他者尊重の資質や態度を養うことにつながった。多様な集団経験をさせていくことは、その集団の中での立ち居振る舞いや生き方について考えたり、自分自身の役割について学んだりするうえで大変有効であった。個と集団の相互作用がうまく図られ、望ましい人間関係の確立につながる体験活動となった。

・　これらの活動をとおして、生徒は、自ずと互いのよさを見つめ直したり、とらえ直したりして、教師の適切な指導のもと、自発的・自治的な活動を効果的に展開することができ、集団への所属感が深まった。

・　互いに認め合い、支え合う活動は、生徒の人間関係を形成する力や思いやり、正義感、連帯感、協力の心などをはぐくむことができた。社会の一員としての自分の役割を考え、「生きる」ということを見つめるよい機会となった。

５．実践事例についての評価

・　生徒の人間関係の広がりにより、様々な集団の中でよりよい人間関係を確立していくことの大切さや、自己実現に向かって取り組むことの意義を学ぶことにつながっている。引き続きねらいを明確にし、教育活動のＰＤＣＡサイクルを実行しながら、目指す生徒像に迫ることができるようにする。

・　学校の取組について、学校経営の重点課題を解決するための具体的な目標である「まなびフェスト」や「学校通信」等を通じて保護者や地域に周知し、協力を仰ぎながら進めてきているが、協働により活動の意義や生徒の変容を直接的に受け止めてもらうことが可能となっていることから、活動の継続を要望する声が多い。

・　学校における全教育活動を通じた継続的な人権教育の指導計画を作成するなど、日常の指導を充実させ、行事や体験活動の際に成果が見られるよう、継続的に実践していく必要がある。

【 人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント 】

大槌町立吉里吉里中学校
参加・体験的な教育活動を取り入れ,自他の思いを伝え合い・認め合う生徒を目指した人権教育の実践例である。全校生徒数 100 名の実態と地域の特性を生かした研究内容であり,人権教育の基本が生徒個々の日々の学習や行動,生き方などに定着している。その中心的な取組は,１年から３年の縦割り集団による吉里吉里中大遠足,２年生の農業体験宿泊学習および福祉施設での介護体験活動,小学校６年への入学説明会などである。 これらは,幼少期からの固定化しがちな人間関係や役割意識に,個々の生徒の成長に即した新たな価値や人間的な温かい感覚をはぐくむものである。大遠足では,３年生をリーダーとした学年を超えた触れ合いがみられ,16ｋｍのコースを歩き通すたくましさも身に付けている。農業体験では,宿泊を通した集団活動のよさや勤労の厳しさ,尊さを実体験として学んでいる。そして,福祉体験では高齢者との触れ合いを通して,相手の立場に立つことの大切さや思いやり,いたわりの心情などの人権感覚の本質を学ぶ体験をしている。